

# 見ることと見られること

——異性の接近事態における一実験——

堤 雅 雄

---

Masao TSUTSUMI

Looking and Being Looked at

——An Experiment in the Situation of Opposite  
sex Dyads' Encounters

---

## 序

まなざしは、人と人との間に濃密で力動的な場を形成する。そこではお互いの意識がまなざしを通して流れ出で、流れ込み、錯綜し合う。

ワンウェイミラーから覗く時のように、「まなざす者」と「まなざされる者」とが截然と分かれる場合には、見る者のまなざしは見られる者の身体の隅々にまで浸透してゆき、相手の存在を丸ごと物と化する。その意味でまなざしはそれ自体、否定的契機を孕んでいる。「見られる者」となることは、Sartre, J.P. (1943) のいう「他有化」されることであり、一種の疎外態である。

人と人が向かい合う場合にも、お互いは常に「見る者」か「見られる者」かのどちらかの立場をとる。同時に両者であることはできない。それでいてこの両者はめまぐるしく逆転しあう。見る者である意識はすぐさま自分もまた見られる者であるとの意識を喚起する。2つの意識は自一他の間で相克すると同時に、自己の中に2つの自己を現出する。まなざしを通して見出すものもまた、相手の存在であると同時に、相手のまなざしの中に映し出される自己の存在である。2つの人格が出会う場には、様々な意味での二重性が横溢する。これら様々な「二重性」を生きることが、我々の「実存」である。

まなざしはまた、相反する2つの感情を荷いうる。1つは親和性であり、いま1つは攻撃性である。

我々は、他者の「暖いまなざし」に支えられて心の平

安を得ることがある。その時、自一他間の障壁はまなざしによって溶解し、互いの心情はまなざしを通して融合する。このような「暖いまなざし」はしばしば微笑を伴っている。

逆に、我々は他者の「冷たいまなざし」によって射すくめられ、呪縛され、時には侵害されることすらある。この時、我々の表情は固く凍てつき、仮面と化していく。

前者は、母親と幼児との間や、愛する者同士の関係において、後者は例えば「邪眼 (evil eye)」という形容でもって、しばしば描かれている(福井, 1984)。

相手のまなざしが、「冷たい」ものか「暖い」ものか判然としない場合もある。強いまなざしを感じるのに、その意味がよく読みとれないとき、我々はある種の不安に襲われる。この種のまなざしに出会う時、我々のまなざしもまた曖昧さを帯びることとなる。どのようなまなざしを返してよいか分からなくなるからである。

相互の視線が、そしてそこに表わされる志向性が錯綜する時、我々の経験する心性こそ、「羞恥」や「当惑」と呼ばれるものである。羞恥する者の視線は常に宙に浮き、その意識はただただ「見つめられる」意識に支配されている。

筆者が以前、羞恥心性の内包するものを分析した際にも、羞恥心性の中核にこのような意味での「見つめられる」意識が見出された(堤, 1983)。

羞恥感情を人工的に喚起するには、失敗経験を起こさせる(園原, 1934)など、幾つかの方法が考えられるが、今回は見知らぬ異性に見つめられる事態を設定し

て、まなざしそのものもつ不思議な力がどのような心理的・生理的反応を引き起こすかを見てみることにする。

2人の人間がつくり出す場には、これまで述べてきたように、互いのまなざしが大きく関わってくるが、それと同時に互いが取る空間的距離の要因も見すごすわけにはいかない。

自一他との物理的距離は、相互の関係性の質や対人感情の強さに規定される。即ち、一般に関係が深ければ深いほど、愛や憎しみの感情が強ければ強いほど、お互いの物理的距離は接近する。逆に物理的に接近することは、相手に何らかの関りあいを求めることとなる。このことはこれまで、「個人空間」(personal space)の名の下に、生態学的に記述されてきている(例えば、Hall, E. T., 1966)。

ここでは、前述の Sartre 的な問題意識から「見る者」と「見られる者」との関係について論じた Argyle, M. & Williams, M. (1969)の研究と、個人空間の文脈から企画された八重沢・吉田(1981)の実験を参考に、1つの探索的実験を試みてみた。

## 実 験

### I 方法

#### 1. 被験者

被験者は島根大学の各学部の女子学生40名。うち20名を直視群に、残りの20名を非直視群に充てる。実験実施上の都合で、直視群のうちの10名のみが教育心理学専攻生となった。また被験者の中で、モデルの顔を見たことのある者が両群に1, 2名いたが、親交のある者はいなかった。

#### 2. モデル

実験室で被験者が対面するモデルは男子学生で、この1人のモデルが同じ服装で全ての被験者にあたることになる。

#### 3. 実験条件

1) 視線条件: 教示によって被験者の視線の方向を操作し、次の2群を設定する。

直視群はモデルの眼を見続けるように、非直視群はモデルの姿を見続けるように教示される。これに対応してモデルの側も、直視群に対しては被験者と視線を合わせるように、非直視群に対しては被験者の頭上周辺に視線を向けるようにする。

2) 距離条件: モデルと被験者との間の距離によって次の4段階を設ける(図1参照)。

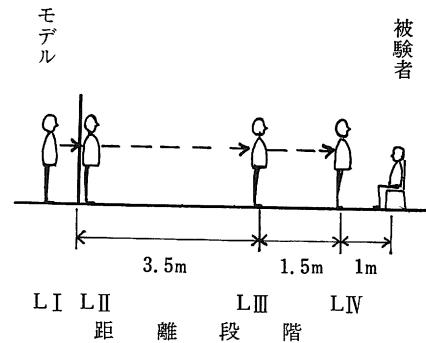


図1 実験場面の設定

距離段階I(L I)—モデルは被験者から6m離れた位置にある衝立の後ろにあり、このことは実験者によって被験者に知らされる。しかしその姿は被験者には見ることができない。

距離段階II(L II)—モデルは衝立の後から出て、被験者から6m離れた距離に立って被験者の方を見る。

距離段階III(L III)—モデルは被験者から2.5mの距離に立ち、被験者の方を見る。

距離段階IV(L IV)—モデルは被験者の前1mの距離に立ち、被験者を見る。

Hallの表現を借りれば、L IIは「公衆距離」に、L IIIは「社会(対人)距離」に、そしてL IVは「個体距離」(いわゆるバブル)に対応する。またL IIIの2.5mの距離は、八重沢らの「気づまり」を感じる距離、L IVの1mは「目をそらしたい」と感じる距離の平均値に各々ほぼ対応している。

#### 4. 測度

従属変数となる測度は以下の通りである

- 質問紙 A(Q<sub>A</sub>)による各段階における心理評定値
  - 気まずさ度: 「あなたは今どのくらい気まずさを感じていますか」
  - 不安度: 「あなたは今どのくらい不安を感じていますか」
  - 緊張度: 「あなたは今どのくらい緊張を感じていますか」

いずれも「全く感じない」(1)から「非常に感じる」(6)までの6段階で、各距離段階終了時点毎に評定してもらう。

#### 2) 質問紙 B(Q<sub>B</sub>)による事後の評定値

- モデルに対する好意度: 「モデルに対してどのような印象をもちましたか」(良い印象5—悪い印象1)
- みつめられる意識: 「相手のまなざしをどのくらい意識しましたか」(意識した5—意識しなかった1)

○相手のみつめられる意識の推測：「相手はあなたのまなざしをどくのらい意識していたと思いますか」（意識した5—意識しなかった1）

○主—客関係の相対的認知：「あなたはどちらかといえば、相手を観ていましたか、それとも相手から観られていましたか」（観る側5—観られる側1）

○実験自体に対する受容度：「もう1度、この実験をやってみてみたいですか」（したい5—したくない1）

以上の5項目について、全ての距離段階を終了後、その場で5段階で評定してもらう。なおこれ以外に、実験終了後に、別室で Snyder の SMS を翻訳したものについても答えてもらったが、日本版作製上未解決の問題が多く、今回の分析からは除外した。

3) 生理指標：生理指標としては心電位、眼球電位（水平方向）を三栄測器社製のポリグラフで測定する。各々の導出部位は、心電位については左右の前腕部、眼球電位は左眼の左側及び右眼の右側である。信号はFM電波で発信され、被験者から離れたところにある受信部分で増幅・記録される。このデータを基に、心拍数と水平方向の眼球運動（微小運動を除く）の頻度が算出される。

以上の他に、実験室の天井角に設けてある2台のビデオカメラによって、被験者とモデル双方の行動が合成して録画される。このカメラの存在については殆んど被験者は気づいていなかった模様である。この録画データも分析の参考として用いられた。

## 5. 手続き

被験者は実験室に入ると、実験についての簡単な説明を受けた後、椅子に座って電極を装着される。実験中には実験者の方を振り返ったり、席を立ったりしないよう

に、また手を激しく動かさないようにとの指示も受ける。それからしばらく瞑目してリラックスした後実験が始まる。教示の概要は次の通り。

「あの衝立の向うに男の人が1人います。」

（15秒間、ポリグラフによる測定）

「机の上の紙に、いまの気分を記入して下さい。」

（以上が距離段階Ⅰ）

「これから男の人が衝立の後から出てきて、だんだんとあなたに接近してきます。その時あなたはその人の眼（姿）を見続けるようにして下さい」

（モデルが姿を現わし、6mの距離に立つ：距離段階Ⅱ、ポリグラフによる測定）

以下同様にして各段階の心理評定（ $Q_A$ ）と生理指標の測定を行なう。全ての段階を終えた後、 $Q_B$  が与えられる。

## II 結果

### 1. 実験中の心理・生理的反応

まず  $Q_A$  に対する反応をみでみる。結果を図2, 3, 4に示す。視線条件×距離条件の2要因の分散分析の結果は次の通り。

「**気まずさ**」については距離要因に主効果がみられ（ $F=24.997, df=3/114, p<.01$ ）、交互作用も有意であった（ $F=3.138, df=3/114, p<.05$ ）。両群間には全体として有意差はなく、いずれも距離が接近するにつれ気まずさは高まっているが、特に直視群の変化の方が顕著である。まなざしの効果は直視群により強く出たものと思われる。

「**不安**」については全体にそれほど大きな値は示していない。両群間の差も有意ではない（ $F<1$ ）。距離要因、交

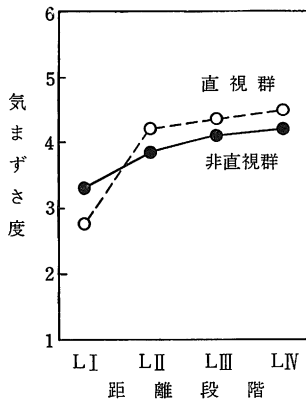


図2 各距離段階における「気まずさ」の平均評定値

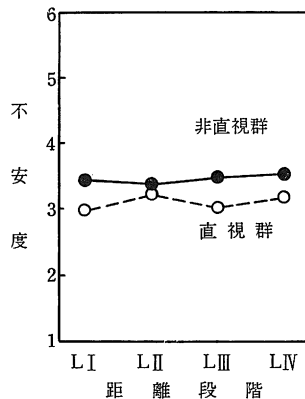


図3 「不安」の平均評定値

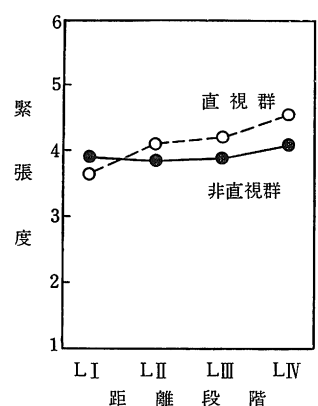


図4 「緊張感」の平均評定値

相互作用も同様である。

緊張感でも両群間に有意差は認められない。全体的に距離が近づくとつれ高くなる傾向がみられたが、わずかに有意水準にまでは至っていない ( $F=2.547, df=3/114, p<.10$ )。ちなみに直線群のみをとってみると有意水準にまで達していた ( $F=6.333, df=3/57, p<.01$ )。交互作用は認められない。

全体として両群の被験者は、距離の接近につれ気まずさと緊張感の高まる傾向を示し、特に直線群において変化は顕著であった。しかしその気分は不安と呼ぶほどのものではなかった。

次に生理反応の測定によって得られた心拍数と眼球運動(水平方向)の頻度を図5, 6に示す。2要因の分散分析の結果は以下の通りである。

心拍数については非直視群の方が直視群より一貫して高い値を示した ( $F=5.058, df=1/38, p<.05$ )。平常時の値が不明であるためはっきりとしたことは言えぬが、両群とも実験室に入った段階からかなり高い覚醒水準にあったと思われる、距離による変化はみられなかった。交互作用も有意ではない。

群間の差については、直視群中の心理学専攻生によって生じた可能性がある。専攻生は実験の経験があり、比較的緊張が低かった可能性があるからである ( $Q_A$  にはそれは表われなかったが)。実際、専攻生の心拍数はやや低い値を示していた。しかし専攻生と非専攻生との間の心拍数の差は有意ではなかった ( $F=1.10$ )。

水平方向のマクロな眼球運動は、各距離段階で1人につき0から最高5回までと、比較的小さな値を示した。

モデルを見るようにとの教示は一応有効であったと考えられる。両群間に差はみられず、距離要因の主効果のみ有意であった ( $F=7.195, df=3/102, p<.01$ )注。

両群ともL I と L IV で大きく、中間のL II と L III では小さい。L I で大きいのは視線の対象がないため、L IV で大きいのはあまりに接近しすぎているためと思われる。

## 2. 事後の質問紙 ( $Q_B$ ) の評定

結果を表1に示す。両群間の比較に入る前に、まず直視群中の心理専攻生と非専攻生の間に差がみられるか確認してみた。しかしここでも両者の間に有意差は認められなかった。ただ実験に対する受容度に、専攻生の方が高い傾向がみられた ( $t=1.789, df=18, p<.10$ )。これも結果を左右するほどのものではなかった。専攻生とはいえ殆んどが1年目の2回生であり、さほどの差が生じなかったのであろう。以下両者を合わせて直視群として分析を進めていく。

まず、モデルに対する好意度は良くも悪くもないという者が全体の過半数で、否定的なのは3名に過ぎなかった。筆者からみてモデルはなかなか魅力的な好青年で、被験者のこの反応はやや抑制的に思われる。両群間に差はみられない。

次に相手からみつめられる意識であるが、これは直視群の方がより強かった ( $t=2.991, df=38, p<.01$ )。予想された通りである。

これに対し、モデルのみみつめられる意識の推測では、

注；サンプル数：直視群19名、非直視群17名。他の4名のデータは読み取り困難のため除外してある。

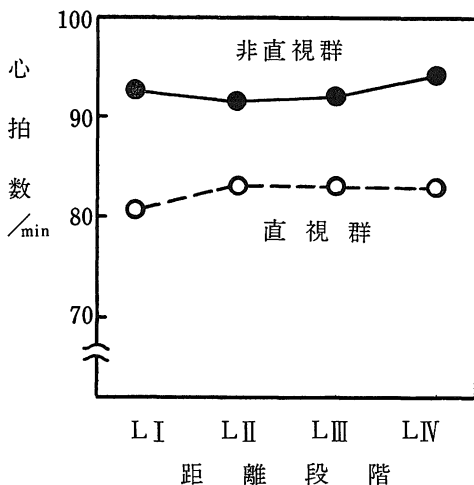


図5 各段階における心拍数の平均値

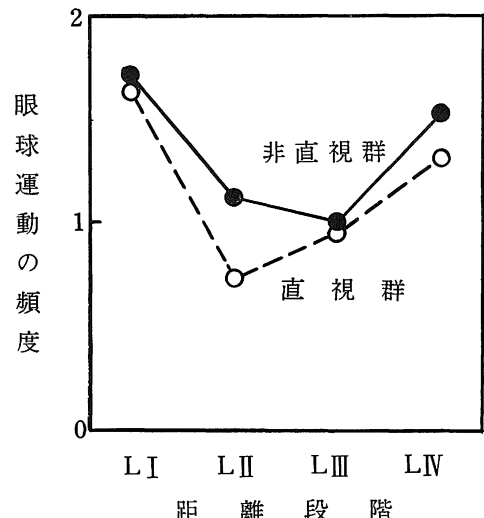


図6 水平方向の眼球運動の平均頻度

表1 事後の質問紙 (Q<sub>B</sub>) における評定値

項	目	直 視 群		非 直 視 群		t
		平均値	(S D)	平均値	(S D)	
	モデルに対する好意度	3.40	(0.74)	3.20	(0.75)	0.848
	みつめられる意識	4.25	(0.94)	3.15	(1.35)	2.991**
	相手のみつめられる意識の推測	2.70	(0.90)	2.45	(0.92)	0.869
	主客関係の相対的認知	2.25	(1.09)	3.05	(1.24)	2.167*
	実験自体に対する受容度	2.20	(1.03)	2.00	(0.84)	0.673

評定は1から5の5段階

\*... $P < .05$ , \*\*... $P < .01$ 

両群ともやや否定的であった。群間に差はない。

相互の主客関係についての認知については、非直視群がどちらともいえぬといったところであったのに対し、直視群の方はやや客体意識の方が強かった。両群間の差は有意である ( $t=2.167$ ,  $df=38$ ,  $p < .05$ )。この差は主として、自分のまなざしに対する意識より、相手に対する意識の差によると解される。

被験者の実験そのものに対する態度はいささか否定的である。もう1度やるのにはためらいがちである。両群間に差はない。

### Ⅲ 考 察

結果をもとに、被験者の実験中の心理を再現してみよう。

最初のセッション (L I) では、モデルの存在は知らされるが姿は見えない。被験者は気まずさや不安はまだそれほどではないが、若干の緊張を感じている。この緊張感には実験そのものに対するものと同時に、未だ現れぬモデルの存在に対するものも含まれていると思われる。この対象のない、あるいは不分明な緊張感の中で、被験者の視線も宙に浮いている。

次のセッション (L II) でモデルは初めて姿を現わす。モデルの出現そのものは予め知らされているが故に、それに対する動揺はそれほど大きくはない。しかし相手の眼を直視しなければならぬ直視群では、恐らくはまなざしの相克の故に、「気まずさ」が急激に増大する。これには緊張感も伴う。まなざしそのものの影響力は直視群において大であると考えられる。

この L I から L II にかけてのこの心理的变化は心拍数の変化には現れていない。これは L I 段階から既に心拍数が高まっていたことによるものと考えられる。

L III, L IV とモデルが接近してくるにつれ、気まずさや緊張感はさらに増大する。個人空間を侵すところまで

くる L IV でそれは最高となる。しかしそれは不安というほどのものではない。

このような接近に伴う変化もまた、心拍数には反映されていない。理由は前述と同様だと考えられるが、ただ一貫して非直視群の方が直視群より高いのは何故だろう。予想に反する結果である。

両群間の違いについて考えてみよう。

直視群の方は、自分をみるめるモデルに対して、自分もまた相手を見つめ返さなければならない。お互いのまなざしは相克状態にあるが、被験者はみつめるという自分の役割に依拠することによって相手のまなざしをはね返すことが可能である。

これに対して非直視群は相手のまなざしを見返すことは必要でない。このような場合、恐らく被験者にはモデルを見てはいるが、見えてはいない可能性がある。そうになると逆にモデルの視線は、実際はそうでなくとも、なおさらに自分の方をじっと凝視しているように思われてくる。見つめられる意識が、実際に見られている量とは無関係なばかりか、逆に実際にはあまり見つめない方が見つめられる意識が高まるという奇妙な現象は、Argyleらの実験で既に指摘されているところである。

従って非直視群の方が、見る意識より見られる意識をより強く感じていたことは充分考えられることである。この、被視感とお互いの志向性のずれこそが羞恥や当惑といった感情を生起させることについては、前回筆者が述べたところである。

ところで、以上のような推論は、事後の質問紙 (Q<sub>B</sub>) の上で確認されるであろうか。残念ながら結果は否定的である。

相手のまなざしに対する意識は、むしろ直視群の方が強い。しかも彼女達は自分達を、観る側というより観られる側だと感じている。観られる意識の強い群の方が、むしろ心拍数が相対的に低くなっている。関係は再び逆

転する。

自己を対象化し、回顧的に捉えた質問紙上の反応と、より直接的で即時的な生理的反応が一致する必要はないといってしまうまでも、他の可能性を考えてみよう。

例えば、被験者は見つめられる意識の中で、羞恥や当惑といった否定的な情動以外の、より肯定的な情動、別の言い方とすれば「悪い気はしない」といった気分にあったのではないか。

Buss, A. H. (1980) や Argyle らなど欧米の研究者は、女性の性役割の一つとして、しばしば performer (即ち観られる者) であることを挙げ、audience (即ち観る者) である男性とは対比的に描いている。実際、Argyle らの実験では、男女が向い合う場面では、女性の方が男性よりずっと観られる者としての意識が強い(特に青年期において) ことが確認されている。女性が文化的規定によって、観られる者としての役割を演じ続けてきているとすれば、見つめられることによる困惑や動揺はそれほど大きくないのかも知れない。

彼女らにとって問題は、見つめられていることよりむしろ、見つめられているかもしれないことである。見つめられているかどうか曖昧である時こそ、自分の対応にとまどってしまう。相手のまなざしが確認できる直視群に比べ、非直視群の方が心拍数が高いのはこのような理由によるのではなからうか。

試みに QA の各項目における評定値と心拍数の相関をとってみると、概ね次のような結果が得られる。

当然のことながら、両群とも相手のまなざしを意識すればするほど、主-客関係の相対的認知においても、客体としての意識が高くなっている(直視群  $r = .694, p < .01$ , 非直視群  $r = .480, p < .05$ )。しかも自分が見られているほど、相手の方も見られていると感じているのではないかと思っている(直視群  $r = .442, p < .10$ , 非直視群  $r = .548, p < .05$ )。そしてこの見られる意識の程度と心拍数との相関値は全てマイナスである(直視群の L I 時での心拍数との間に 5% レベル, L III 時との間に 10% レベル, 非直視群の L II 時の心拍数との間に 10% レベルの有意水準で)。一般に見られる意識が強いほど心拍数が低くなる傾向があるようである。

## 結 び

今回の実験は、青年期の異性同志が向かいあい、視線

を交しあいながら接近するという事態を設定することによって、羞恥や当惑といった心理的動揺を引き起こし、その時の心理的・生理的变化を記述することを目的に企てられた。

実験前には直視群の方が動揺が大きいのではないかと予測を抱いていたが、結果は必ずしもそうではなかった。たしかに、モデルが姿を現わすこと、接近することの効果は直視群の方に大きい。しかしそれは心拍数の変化には表われなかった。しかも非直視群の方が心拍数は高かった。相互に相手の眼を見つめあう直視条件より、漠然と相手を見る非直視条件の方が、より当惑事態を招きやすいということかもしれない。この点については今後の、より厳密な実験が望まれる。

これまで、この種の相互凝視事態の研究は Argyle らの一連の研究を除けばそう多いたとはいえない。しかしまなざしを媒介にいわば対他存在におとしめられることによって経験される心の動きは、自-他-の相互性について、自意識について、そして人格の基底にあると思われる人間の人間に対する基本的な態度について、様々な知見をもたらしてくれるような気がして極めて興味深い。

## 参 考 文 献

- Argyle, M. & Williams, M., Observer or Observed? —A Reversible Perspective in Person Perception. *Sociometry*, 32, 396-412, 1969.
- Buss, A. H., *Self-consciousness and Social Anxiety*, W. H. Freeman & CO., 1980.
- 福井康之, まなざしの心理学—視線と人間関係, 創元社, 1984.
- Hall, E. T., *The Hidden Dimension*. Doubleday & Co. 1966. (日高敏隆他訳, かくれれた次元, みすず書房, 1970).
- Sartre, J. P., *L'être et le Néant*. Gallimard, 1943, (松浪信三郎訳, 存在と無—現象学的存在論の試み, サトル全集, 人文書院, 1956).
- 園原太郎, 羞恥心の心理学的—研究, 心理学研究, 9, 105-148, 1934.
- 堤 雅雄, 羞恥論への予備的考察, 島根大学教育学部紀要, 17 (人文・社会科学編), 1983.
- 八重澤敏男・吉田富二郎, 他者接近に対する生理・認知反応—生理指標・心理評定の多次元解析, 心理学研究, 52, 166-172, 1981.